

# 一 市民の戦争体験

## 第一部 武蔵野の空襲とその記憶



## 一 戦時中、戦後の思い出

桜堤

橋本 はしもと

又治 またじ

### 工場での仕事について

私は大正6年生まれで、江東区で育ちました。昭和15年から川崎の池貝鉄工という会社に勤めており、省線と呼ばれた今の京浜東北線で東京から通っていました。今の、東京いすゞ自動車（当時は東京自動車）が戦車の車体を作っていて、私たちの会社はそのエンジンを作っていました。終戦のころは、日本にもうガソリンはないので、新潟で採った重油で機械を動かしていました。その重油をエンジンの中で爆発させるには、ポンプが要り、そのポンプの取り付けをしていました。エンジンの確認のため、富士の裾野に戦車を持って行っては、試運転をし、エンジンの具合を見ました。

その後、海軍の要請で小金井へ来ました。その小金井の工場は軍需工場なので、皇国第何号というような号数で呼んでおり、機関銃の砲身を作っていました。B29はおよそ1000メートルの高さで飛んでくるのですが、日本の高射砲は8000メートルぐらいまでしか届きません。B29を迎撃する日本の戦闘機も同じ8000メー

トルの高さまでしか上がることができませんでした。

当時、日本軍機に積んでいる機関銃は20ミリのものでした。B29を撃墜するために、工場では新しい30ミリの機関銃の砲身を作りました。前に勤めていた池貝鉄工で砲身の製作技術を習ったので、そのとき学んだ、砲身の中をらせん構造にくり抜く技術を活かすことができました。しかし口径が大きくなり弾が大きくなる分、使う火薬は増えるのでそれは大変なことでした。

できあがった砲身は鈴鹿工廠に運ばれ、他の部品と組み合わせて機関銃として組み立てられ、中島飛行機で作られた飛行機に搭載されたと聞いています。工場では、始業が7時で終業が17時でした。しかし17時で帰れることはなく、大体終業は21時でしたし、3日に1度は徹夜でした。休みもひと月に2回休めればよかったです。

今の天皇陛下が幼少のころ、小金井公園に疎開されましたが、その宮殿が火事を出して焼けた際、我々が工場から火を消す手伝いに行きました。

その工場は、終戦後、軍とのつながりも切れ、山本工業という名前になりました。現在は小金井製作所と名が変わりましたが、営業をしています。私は、そこで66歳まで働きました。

私は戦争に行くことはありませんでした。3回召集令

状が来ましたが、召集令状が届いても、私にはエンジンの知識があったため、工場長から「おまえに行かれるとエンジンが作れなくなるから行かなくていい。」と言われたためです。

エンジンの知識は、池貝鉄工に勤める前に学びました。今のニコンという会社が当時日本光学と言って、その分工場が三河島にありました。14歳のころ私は、そこで働き始め、その間、電気の専門学校にも通いました。その学校は、神田の美土代町にあり、そこで、早稲田大学の関敏郎さんに出会いました。この方は、ディーゼルエンジンの日本の権威です。その方から、エンジンの知識を教わりました。自分自身に納得がいかなければなら、先生に工場での仕事が終わったら来いと言われ、先生の家泊りに泊り込んでエンジンについて教わりました。

### 空襲について

昭和17年の4月18日にB25という飛行機がちょうど今の羽田の飛行場辺りから飛んできて、初めて東京を空襲しました。東京での一番最初の空襲だと思えます。

B29が中島飛行機武蔵製作所に爆弾を落とす前に、照明弾を工場の真上から落とすことによって、工場の正確な場所が分かるそうです。バケツの中へ砂利を入れると、

ザラザラツと音がしますが、爆弾が落ちる音はあの音と同じです。ああいう音を聞いたことのある人は今はないでしょうね。

また、中島飛行機武蔵製作所だけではなく豊和重工（今の西東京市のヴィーガーデンのある場所）も昭和20年の初めに空襲を受けました。私は徹夜で仕事をしていましたが、ものすごい爆撃でした。

下町の空襲のとき、たくさんの焼夷弾が落ちましたが、工場の空襲のときにも周りにはたくさんの焼夷弾が落ちました。その焼夷弾の中身にはゴムが使われていたが、そのゴムの焼けかすを拾って自転車のパンクの修理に使ったことがあります。

私は昭和17年から桜堤に住んでいましたが、戦後、何度か改築をしました。あるとき、三畳の部屋を壊したのですが、床下から高射砲の弾の破片が出てきました。弾の頭の部分です。このあたりには、まだ高射砲の弾の破片が埋まっているのかもしれませんが。

### 昔の桜堤について

桜堤あたりには住宅が208軒ありましたが、そのうちの14軒が、豊川の海軍工廠からの命令で移ってきた人で、そのうち最初の2軒は昭和16年、私は翌年に単身で桜堤

に来ました。まわりに家も少なく、武蔵境の駅まで1人の地主の方の土地でした。玉川上水には当時柵がなく、今は、ちよろちよろとした流れですが、底が深く流れが速いので、人が落ちたら最期ということ、人喰い川と呼ばれていました。一面のはらっぱなので、風がふくと赤い土ぼこりが舞い上がり、その土ぼこりが家の中に入ってきて、夜帰って来たときは、畳が泥だらけで、寝られないような状態でした。27歳でこちらへ引っ越して来ましたが、この辺は砂利道で、馬車が通るとうるさくて寝られませんでした。

戦争が終わってからは、食べ物がなくて困りました。土手の草を食べました。ここは米が取れないので、サツマイモを食べていました。現在のURマンションが建っている地帯は、雨が降ると水が出てどうしようもありませんでした。

住宅の間に細い川があり、そこで農家の方が野菜を洗っていました。今、URの中を流れている仙川と同じです。しかし、こちらの川は、どぶ川みたいに細い川で、いろんな物を洗っていました。

私はよく「ここは人間の住むところじゃない。」と言っていました。だから、私の両親や兄弟たちはここへ来たがらなかったんですが、昭和20年1月に深川から母と

妹弟が疎開してきました。そして現在に至っています。

ご本人からの聞き取りにより作成しました。

## 二 中島飛行機武蔵工場での空襲体験

西東京市

古内 ふるうち

竹二郎 たけじろう

昭和十七年（一九四二年）四月二日、私は中島飛行機多摩製作所に第一期の養成工として入社した。当時の日本はアメリカやイギリスなどに宣戦を布告し、いわゆる「アジア・太平洋戦争」が始まったばかりであった。

養成期間は一般教養や機械工学と工作実習を学んだ。その他に青年学校の軍事教練もあった。最初に住んだ独身寮は、保谷町上保谷新田（現・西東京市柳沢二丁目）のところだった。半年ほどして武蔵野市関前（現在の千川小学校とクラルテ武蔵野のところ）に移った。戦時特例で十二月まで養成期間の授業を打ち切り、十八年の一月から現場に配属された。

中島飛行機多摩製作所は、海軍の飛行機のエンジンを造る目的で、昭和十六年の十一月に稼働したばかりであった。その頃の飛行機の生産は、戦争をする上で必要なものであり、国の至上命令であった。それで昼・夜二交替や三交替の二十四時間のフル稼働であり、最盛時には正規社員、工員・徴用工・学徒動員の生徒・その他を含めて約五万人が働いていた。

配属された職場は六棟目の二階東の方で、エンジンのクランクとピストンを結ぶピストンピンと言う部品を製造していた。十五歳の私達も二交替夜勤体制に組み込まれた。未成年の労働規制もない時代で、十二時間の半強制労働だった。昭和十八年に武蔵野と多摩が統合し、武蔵製作所になったから東工場に移った。給与は良かったが買う物が無いので使い道がなかった。

昭和十九年（一九四四年）十一月一日の昼過ぎ警戒警報が鳴り、すぐに空襲警報に変わった。工場の上空をB 29一機が、銀翼を光らせ白く長い飛行雲を引きながら東から西の方に飛んでいくのが見えた。（初めてB 29を見た時は綺麗だなあと思った。）下から高射砲を打つのだが八メートルくらいで爆発し、一万メートルの高さを飛ぶB 29までは届かなかった。この日は偵察だけだった。たぶん三日、五日、七日も来たと思う。戦後知ったことだがこの時に工場の全景を航空写真で撮って行ったのである。

十一月二十四日、昼食のため食堂に行く途中、突然ドカーン、ドカーンと今まで経験したことのない大きな音がした。「空襲だ。防空壕に入れ」と言う声だったので、急いで近くの防空壕に入った。グオウーゴウー、ドカーンドカーン、ズシンズシンと、音と地響きがする度に防空壕の土が崩れるので生きた心地もなかった。静かになったので

外へ出てみると、今まで働いていた工場が燃え、本館の時計台が無残にも壊れていた。工場が燃える油の匂いや、焼夷爆弾の硫黄が燃える異様な臭いがしている中で、地下道に避難していて、直撃を受けて負傷した人や死亡した人達が、担架で病院に運ばれて行った。死亡七十八名、重軽傷が八十余名の犠牲者が出たと記録にある。

これがB 29による東京空襲の始まりであった。会社はこの時まで工場の外へ避難することを禁止していたが、犠牲者の多いのに驚いて、禁止令を解除した。十二月三日の空襲のときは、武蔵境駅や三鷹駅の方に逃げる人波が続いた。上空を見ると編隊で次々と飛んでくるB 29が、弾倉を開いた瞬間黒いもの（爆弾）が一瞬見えたが、そのあとは空気を圧するようなグオウーグオウーと爆弾の落下する音がし、そのうちドカーン、ドカーンと破裂する音が工場の方でした。空襲警報解除で職場に戻ると、屋根がすつ飛び機械の周りはメチャメチャに壊れていた。会社は補修よりも疎開の道を選んだ。私の職場は保谷にあった山口自転車保谷工場に疎開した。中島とニキロくらいしか離れていなかったのも、危険度は同じくらいだった。警戒警報や空襲警報は毎日のようにあったような気がする。

特に印象に残るものだけ列記する。翌年の二月十七日は艦載機（\*1）の攻撃だった。ちょうど私たちのいるあた

りから急降下し、中島めがけて爆弾を落とす。これは命中率が高く被害も大きかった。爆弾を落とした後に人を狙って機銃掃射（\*2）することもあった。

四月二日は夜勤だった。夜中に空襲警報が鳴って、照明弾が落され周りは昼のように明るくなった。シュツシュツと何か落ちる音がするだけで爆発はしなかった。警戒警報が解除されたころから、ボカーン、ボカーンと爆発し始めた。時限爆弾であった。何時何処で爆発するか判らないので、仕事を手につかなかった。

四月十二日の一トン爆弾のときは、夜勤明けのため寮で寝ていた。あちこちで大きな音がしたので急いで工場内の防空壕に入った。ズシューンと強く大きな音がして、防空壕が崩れて半分生き埋め状態になった。土をかき分けて外を見ると、土の塊が雨のように降り紙屑が舞っていた。静かになつたので外に出てみると、五十メートルも離れていない一軒の家が跡形も無くなっていた。救護の兵隊たちが来て掘り起こしたが、出てくるものは肉体の破片だけだった。左腕が千切れ腕時計だけ残っていたのが忘れられない。ここに住んでいた五人が直撃で吹き飛ばされて死亡したのである。樺の木には肉片や着物の切れ端がくっついてるのが無残だった。まだまだ経験したことはあるが紙数が足りない。

東洋一の近代設備を誇った中島の工場も、敗戦までの激しい空襲で完全に廃墟と化した。周辺の練馬区や西東京市でも流れ弾が落ちて、多くの被害を受けた。

今考えて見ると、戦争ほど恐ろしいことは無かった。戦争とは人と人の殺し合いであり、大量の生産物と緑豊かな自然の破壊である。現代の進歩発達した兵器と戦法では、戦闘員・非戦闘員にかかわらず多数の人が被害者になる。特に原子爆弾の発明は、その破壊力と放射能の発生で、大量の人命を奪い自然を破壊する兵器となっている。これは人類の破滅と地球の破壊を意味する以外何物もないと思う。私は「どんな戦争も二度と起こしてはいけない」と、戦争を知らない世代の若者や子供たち、そして世界中に、戦争を体験した者として語り継いでいく決意である。

二〇一一（平成二十三）年十一月二十四日、都立武蔵野中央公園（はらっぱ公園）で「武蔵野市平和の日制定」の記念植樹があった。植樹が終ったあと、保育園の子供らも含めた参加者一同で、平和の鳩の風船を飛ばした。その「鳩の風船」が南風に流されて高く飛んで行くのを見た瞬間、六十七年前の中島空襲のB 29の編隊を思い起こした。似ていたのだ。あの時の飛行航路と同じ様に西東京市の方に飛んで行くのだ。私の帰る方向なので自転車に乗り上空を見ながら「ああB 29でなく、平和の鳩なのだ。平和の日

本の空なのだ」と平和の有難さをしみじみと感じた。

\* 1 艦載機（かんさいき）

航空母艦に搭載され、そこから飛び立つ航空機のこと。

\* 2 機銃掃射（きじゅうそうしゃ）

機関銃で敵をなぎ払うように射撃すること。

### 三 中島飛行機・武蔵製作所での戦争体験記

西東京市 志賀 一将 しが かずまさ

一九四四（昭和十九）年、中島飛行機武蔵製作所、運輸課に勤めていた。十一月一日。警戒警報発令。聞き慣れない爆音で不審に思い、二階の窓を開けて、空を見上げると、一万メートル位の上空を見慣れない機影が一機、明らかに米軍機だ。その時、高射砲が打ち上げられるが、届かない。八千メートル位で破裂している。敵機は悠々たるものだ。時の軍部は「敵は一機たりとも日本の空に入れない」と豪語していたのに何という体たらく。後に分ったが、この偵察飛行の撮影で、その後の中島への爆撃が始まったのだ。十一月二十四日、第一回の爆撃を受ける。空襲警報が出ても、職場を守れの命令。初めの爆弾は250キロ位か。空襲解除後、三階を突き抜け二階階段の踊り場に不発弾がころがっているのを見た。空襲も回を重ねる毎に、爆弾も大きくなり被害も大きくなってきたので、男子も警戒警報と同時に避難が許された。誤爆もあるのでかなり工場から離れる必要がある。女子はトラックで避難ができた。百機位の編隊から一斉に投下される爆弾はザーと唸りながら落ちてくる。落下音を聞いたら、直ちに大地に腹ば

い、目と耳を指で強くふさぐのだ。爆風で腹わたや目玉の飛び出しや、鼓膜の破れを防ぐためである。

B 29の編隊は富士山を目標に飛来し、そこで向きをかえて中島に向かう。警戒警報から空襲警報まではかなり時間があった。

二月十七日は違った。艦載機は超低空で来るので、発見がむずかしい。この日は警報と同時に銃爆撃が始まった。私は慌てて地下道に逃げ込んだ。地下道は防空壕ではなく、職場間の部品の運搬路。電気は消え、爆煙充滿、入口も見えない。完全に生き埋めか。二十〜三十分して入口から明かりが差し、急いで外に出る。鋸屋根の工場は屋根が無くなり青天井だ。

四月二日、夜間空襲。吉祥寺東町の自宅にいたので、爆弾の落下音は聞こえるのに破裂音がない。朝方になり、井の頭公園のあたりでバン、バンと破裂が始まった。制限爆弾で、公園の池を工場と見誤ったらしい。この夜間空襲では、田無・保谷などの工場外の民家も、かなりの被害が出た。

七・八・九回目の爆撃になると一トン爆弾が用いられた。その落下音は「ザー」ではなく「ゴオー」と唸り、落下時に地上に伏せていると体が舞い上がる程。その破壊力は言語に絶するすさまじさ。鉄筋三階の建物は跡形も無くな

り、中島飛行機は廃墟と化した。工場は浅川に疎開し、高尾山の洞窟で操業。私の所属の課は武蔵境の商店を借りて事務所としていた。

一九四五（昭二十）年八月十五日。正午。玉音放送（\*1）を店先で聞いた。

『朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状ニ鑑ミ、朕ハ帝国政府ヲシテ米英支ソ四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ』。この詔勅の文言中には、ポツダム宣言受諾とか、無条件降伏とかの言葉はない。私はポツダム宣言のことは聞き知っていたので『その宣言』の意味をすぐ理解した。

「あゝ、これで死なないですむ」と歓喜したかったが、軍人課長に殴られると思ったので「あゝ、今夜からは灯火管制の電球の覆いはずせる」と言ったのだが、それでも課長は烈火の如く怒った。「この課長、詔勅の意味が理解できていない」と思った。

昭和天皇の戦争を終わらせる決断と勇気のお陰で、二十歳で死ぬべき命、永らえて八十余歳の今日を得ました、感謝です。でも、昭和天皇が一九四一（昭十六）年十二月八日の宣戦布告を拒否する勇気があったら、あたら有為な青年、国民を死なせずにすんだはず。他国や、その国民を苦しめ、多大の迷惑をかけずにすんだはずです。世界の国、

人々を塗炭の苦しみに陥れた、日本軍部の罪は、どんなに憎んでも余りあります。

\*1 玉音放送（ぎよくおんほうそう）

天皇の肉声（玉音）を放送することをいう。特に一九四五年（昭和20年）8月15日にラジオ放送された、昭和天皇による「終戦の詔書」の音読放送を指す。

#### 四 中島飛行機武蔵製作所での思い出

三鷹市

岩崎 いわさき

兼男 かねお

##### 中島飛行機へ就職

私は、大正15年12月16日に三鷹市で生まれました。

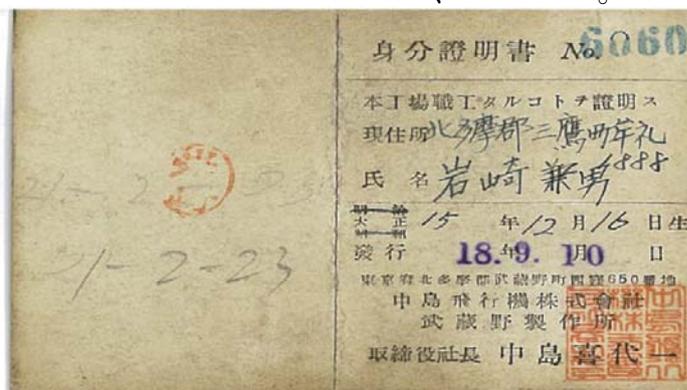
最初に就職したのは、山丸工業株式会社という正田飛行機製作所の下請け工場です。そこでは、主に旋盤工をしておりエンジンを作っていました。その工場に勤めていた時に中島から徴用がかりました。中島飛行機に就職したのは、昭和18年8月23日で、それから昭和20年

8月23日までのちょうど2年間、中島で働いていました。中島での給料はとても良くて、他の人が徴用で行ったときの待遇と全然違っていました。2年4カ月の民間業務経験があったことがその理由だと思います。中島では、一カ月で100円近くの給料をもらっていました。一般の人が一日働いて1円になるかならないかという時代で、18歳くらいの若者が100円の給料をもらっていたので、父がびっくりしていた記憶があります。

中島に入社してからは、保谷の寮に入って約一カ月間の研修を受けました。一緒に寮に入った人たちは、10代から40代の人もあり、中には世帯を持っている人もいま

した。

出勤時の服装は、ゲートルを巻いたもので、当時の国民服というか、作業服の気のきいたものでした。着るときは、結構面倒くさかったです。それが通勤用の服装でした。空襲が始まってからは、みんな鉄かぶとを持って通っていました。仕事場へ入るときには、作業着に着替えていましたが、その作業着に切削油が付着しており臭いがとてもきつかったです。



岩崎氏の身分証明書（出勤時、この身分証明書を守衛に提示しないと工場内に入れなかった。）

## 第6機械職場へ配属

研修後、各現場に配属されたわけですが、私が最初に配属されたのが、武蔵野第6機械職場です。ターレット旋盤だったので、作っていたものは割合に小物が多かったと記憶しています。勤務は2交代制で、昼食は東工場中央付近にあった食堂で食べていました。

### 11月24日の空襲

その後、私は第6機械職場から西工場第3棟の3階にある第17職場へ移りました。そこで昭和19年11月24日にあった空襲を体験しました。

その日は、昼食が終わったあとだったので、昼過ぎ頃だと記憶しています。多くの社員が食堂に行っているころに爆撃がありました。

私は消火班で、焼夷弾がおちてきたら防げと上司に言われていました。食事が終わった後、上司から消火班は、3階の職場に待機するように言われていました。しかし、私と同僚は、この時、警報も耳にしませんでしたし、飛行機も見かけませんでした。上司の指示があったということは、恐らく早くから警戒警報が出ていたと思います。誰かが「空襲だ！」ということ、全員地下道へ降りました。地上には、私を含め5人くらいが残っており、

「岩崎、どうする？」と仲間にかかれたので、「おれが責任を持つから皆降りろ」と答え、全員で地下に降りました。その直後、250キロ爆弾が落ちてきました。実際に空襲の音というのは、秋葉原のガード下を通過する電車の音に似ています。うなつてきて、消えたと思ったら、ダン！とはねる。振動がくる場合は近くに落ちた場合です。爆弾は、三階の屋上から地下まで抜けていきました。爆弾は、私たちのいた場所からは、大体20メートルぐらい離れたところに落ちたようですが、幸いそれが不発だったので、死傷者は出ませんでした。アメリカの爆弾の信管がいいかげん（技術が下手）に作られていたおかげで、助かったと感じました。

その後、工兵が来て片づけ作業を始めましたが、私たちは、何で不発だったのかと話していたら、誰かが「制限装置がついているかもしれない！」と叫びました。みんな散らばり逃げ出しましたが、結局その後は何事もなく、工兵が無事に処理しました。

私たちは、外が暗くなるまで地下にいましたが、空襲に関する情報や建物・人的被害の状況等は何も入ってこなかったもので、職場や建物がどのような被害を受けたのか確認できませんでした。

それから、家まで歩いて帰りましたが、自宅に着いた

のは夜8時頃でした。

私の父親も、当日は、産業報国会という労務者の集まりがあり中島飛行機へ行って働いていました。父は空襲警報が出たから逃げろということで、仲間と共に工場から自宅まで走って帰って来たようです。そのとき50半ばくらいだったと思いますが、全くけがもなかったそうです。父は私が遅くまで帰ってこなかったので死んだと思っただけです。両親には大変な心配をかけました。

私は運がよく、空襲時に工場で勤務していたのはこの時だけでした。

その後、第17職場では、爆撃された後も、被害を受けていない機械で、仕事をしました。

その時上層部は、すでに工場の移転を検討していたようで、候補地としては、浅川（八王子）と福島、それと大谷を考えていたようです。

### 青年学校での思い出

その後、私は青年学校へ職場が移りました。そこでの仕事は以前とほとんど同じで、小さい部品を主に作っていました。

その時の職場の同僚には、いろいろな立場の人がいました。

その中に朝鮮から来た労働者の方々がいました。ほとんど片言の日本語しか話せませんでした。みんな裕福な家庭の人だったようです。そのうち半島労務者の方たちは、他の職場に移っていきましたが、その後は共立高女と海城中学の学生たちと一緒に仕事をしました。

その他の従業員には、現役の兵隊（新兵、航技兵など）やフィリピン帰りの兵隊のグループもいました。フィリピン帰りの兵隊たちは、現地での戦闘中に船が全部やられてしまったので、輸送機で浜松の飛行場へ帰ってきましたそうです。

もうすぐ伍長に任官する人や技術将校もいました。この人たちにはよく面倒を見てもらいました。我々は民間人なので敬礼も何もせず気楽でした。偉ぶったりもせず、普通に会話ができました。自分の年齢を聞かれたので答えると、「もう兵隊へは行かなくて済むね。」と言っていました。変なことを言うなと思っていました。この方は、戦争がもう終わりに近づいていることが分かっていたかもしれません。

この頃の中島の工場は、国の管理工場になっており、名称も第一軍需工廠第十一製造廠皇国三八一三工場という名称に変わっていました。そのような理由で、軍人さんたちも配属されていたと思います。

兵長ぐらいになると、いろいろと融通がきくようで、食糧を探してくれました。私たちが「腹が減った」というと、どこかへ飯上げ（食事当番）に行つて、鉄かぶとの中へ握り飯を持ってきてくれたこともありました。

### 仲間との記念写真

当時の青年学校は、現在の武蔵野四中と千川小との2カ所にありましたが、私は、四中にあった青年学校へ移りました。職場が変わったところに、夜間の爆撃で建物がやられてしまいました。

その時のたった1枚だけ残っているのがこの写真です。この写真は、4月2日の夜間空襲で被害を受けた後に撮ったものですが、爆弾の直撃で倒れた大きなイチョウの横で写真を撮りました。戦時中に写真を撮ることはとても厳しく、特に工場の中で撮るといふのは珍しかったと思います。我々は、どうせ兵隊に行くか福島や大谷に転勤になって離ればなれになるので、空襲でやられた建物を背景にして皆で写真を撮ろうという話になりました。みんな明日がないと思つて生きていた時代ですから、戦争中の仲間というのは、すごい団結力がありました。

そのことを警察に言つと、憲兵隊が許可してくれたそうです。わずか1枚でしたが、この貴重な写真が残りました。



青年学校前での記念写真（昭和20年4月ごろ）

した。青年学校にいたとき、今の成蹊大学の高射砲陣地の近くに防空壕を掘ろうということになったので、実際掘ったところ、軍の人が来てひどく怒られました。ここは軍用道路だから、作戦上こんなところに防空壕は掘っちゃだめだと言われました。

## 先輩の出撃

4月の空襲で工場の電気系統に大きな被害を受けたので、結局、工員たちは各工場へ分散することになりました。境の月島鉄工所と一三六（イザム）工場、それと興亜専門学校（現興亜細亜大学）の3カ所に分かれたのですが、私は一三六工場に行きました。

昭和20年6月頃の「大詔奉戴日」（\*1）に、今日、興亜専門学校に先輩が来るということで待っていました。そこへゼロ戦が飛んできました。今の興亜大学周辺を電信柱の上ぐらいの高さの超低空で、何回となく飛んで帰っていきました。首にマフラーをつけた20歳ぐらいの兵士で、服装から見ても、これから出撃し、二度と帰ってこないだろうなと思いついていました。今でも、その光景が頭の中に残っています。自分たちの作ったエンジンをつんだ飛行機が低空で飛んでいたことに驚きました。自分たちが勉強した学校へ最後の別れに来たようだということを周りから聞いていたので、最後は皆で手を振っていました。あの人はきっと死んでしまうのかと思つたら、本当に何と言つていいかわかりませんでした。最後に中島が空襲された8月8日、一三六工場から東小金井の駅のほうへ逃げたとき、爆弾が落ちていくのを見ていました。「新型爆弾」が広島へ落ちたのは知つて

いたので、もし、これがその爆弾だったら全部死ぬだろうなんて思いながら見ていました。

## 火薬を盗りに：

当時の中島のグラウンド（現在の陸上競技場）に工兵が一時、不発弾を並べて保管していました。私たちは、工場での夜勤の時に暖をとるための燃料調達に、夜間、バケツを持って行って、火薬を盗みに行きました。

今、考えたらぞつとしますが、誰かがタバコでも吸つて、爆弾に引火でもしたらと思うと……。爆薬だから当たり前ですが、実際その火薬はよく燃えました。

## 井の頭自然文化園への爆撃

4月2日の夜間の空襲があつたときは自宅にいました。井の頭公園に爆弾が落ちたということを知りながら聞きました。その時は爆発しなかつたようです。

井の頭文化園の手前に自動車の部隊がありました。確か輸送隊だつたと思います。木炭を燃料にした車を作っていました。もう一つ、11月24日以降に、文化園の近くに軍馬を一時駐屯させてある部隊がありました。また、公園内の松の木から松脂をとつていて、今もハート形に傷ついた松が公園内に残っているそうです。

## 浅草雷門にて

東京大空襲のあと、浅草がやられたというのを聞き、どの程度か3月20日過ぎに神田と浅草を見に行きました。

雷門の前の川で浮いている死体を見たときは本当に驚きました。防空ずきんをかぶって、赤ちゃんをおぶっているお母さんの姿がいまだに記憶に残っています。警察も見ているだけで手の打ちようがなかったと思います。

3月9日の空襲の後、10日以上たってもまだ片づけられていなかったことを思うと、いかに人手が無かったのかなと思います。今、浅草へ行ってみると、観音様は五重塔ができてきちんとしています。当時、観音様はなくなっており、コンクリの塊があっただけでした。黒くなったイチョウの木も何本か残っていました。

## 終戦

私は、8月15日の日は夜勤明けで家に帰って寝ていました。自宅にラジオがなかったので、ラジオのある近くの工場へ父が向かいました。父が帰ってくると、「何か戦争が終わったらしい」、「日本が負けたんじゃないか」と言っていました。これから自分たちはどうなるのか、解雇されてしまうのかという思いで、再び工場へ戻ると、多くの工員が集まっていました。

戦後に知ったことですが、戦争が終わる少し前の昭和20年7月頃、ある新聞記事が掲載されたそうです。アメリカのボーイング社の従業員が、ストライキを始めたということです。戦争が嫌でかと思ったら理由は賃上げだそうです。向こうには余裕があったということです。

## 中島飛行機を退職

終戦を迎えたあとの8月23日に、今の都立小金井工業になつていいる場所で退職金をもらって解散しました。そのときに言われたのが「おまえたち中島にいたのが分からないから、要らないものは捨てたほうがいい」ということです。工場で働いていた証拠書類などは、全部燃やしてしまつたという人もいたようです。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

## \*1 大詔奉戴日（たいしょうほうたいび）

太平洋戦争完遂のための大政翼賛の一環として一九四二年一月から終戦まで実施された国民運動。太平洋戦争開戦の日（一九四一年十二月八日）に「宣戦の詔勅」が公布されたことにちなんで、毎月八日に設定された。

## 五 戦時中の思い出

八幡町

白井 具子  
うすい ともしこ

私は大連生まれです。3歳のとき（昭和7年）、吉祥寺東町4丁目に引っ越してきました。今の吉祥女子中学・高等学校の近くです。でも当時は、現在の位置になく、大久保と新宿の間の線路の脇にあった小さな建物でした。戦後に今の場所に引っ越してきました。周りは養蚕を営む家が多く、桑畑が広がり、養蚕をやっている家は3階建てでした。3階は蚕を飼うため天井が低くて、2階までは普通の建て方でした。

太平洋戦争が始まる直前の昭和15年は、紀元2600年（\*1）ということで、街中がお祭り騒ぎでした。その年には吉祥寺東町で洪水が発生して、腰ぐらいまで水につきり、小学校まで汚い水の中を泳いで通ったことがあります。余談ですが、吉祥寺東町では昭和33年には下水ポンプ場が逆流して、大変な洪水となり、井の頭公園からボートを持ってきたことがありました。今、ちょうど駐在所があるあたりまで、ボートを持ってきて多くの人たちが助けられました。

中島飛行機の工場が武蔵野にきたときのことは、よく

覚えていません。どちらかという私の住んでいたところが西荻窪に近いところなので、三鷹のほうにある工場のこととは分かりませんでした。私は学校に通うのに西荻窪から電車で吉祥寺に行き、そこから帝都電鉄に乗り換えて、三鷹台にある立教女学院まで通っていました。当時の吉祥寺駅は降り降りするお客はいまと違い、少なかったです。立教女学院はアメリカ人の建てた学校でしたが、戦争の始まる前の昭和15年にはアメリカ人の先生は強制送還で帰国させられてしまいました。

我々の家あたりは比較的裕福な人たちが住んでいたせいか、どの家も戦争が始まってあまり食糧には困りませんでした。家にピアノがあり、「ピアノが鳴る、聞こえる通り」と言われていました。八百屋さんや魚屋さん、醤油やさん、酒屋さんが家に御用聞きでよく訪ねてきました。戦争が激しくなると物々交換をしました。例えば、布団を持って行けばお米を5升とか、お餅に換えてもらいました。都心で空襲があると、焼け出された人が逃げ込んできました。周囲の家は大きい家が多かったのですが、全く知らない人を家に入れることもできないので、知っている会社の人を泊めていました。

松籟荘（しょうらいそう・今の松籟公園）のあたりに爆弾

が落ちたことがありました。そこは大根畑で、地面が柔らかく、爆弾は不発で、そのまま土に入ったきり出て来ませんでした。ただ、土がパーツと散って、砂埃になりました。爆弾は20〜30年前に掘り起こされました。また、私が疎開をしていたときに、家の2階の階段のところに、米軍の戦闘機による機銃掃射を受けたことがありました。

昭和20年、16歳の女学校3年生のとき、学校は麹町にありましたが、川崎まで勤労動員で東急機械（現トキコ）の工場に通いました。そこでナットのやすりがけをしていましたが、私は1ヶ月で休んでしまいました。5月27日に空襲を受け、疎開することが決まったからです。私の一級上は、有楽町の日劇で風船爆弾（\*2）を作っていました。糊で風船の紙をつけるから、みんな手の油がなくなりガサガサになってしまいました。

疎開先は岡山県の玉野市宇野でした。東京から岡山まで一昼夜かかりました。兄が、瀬戸内海の島にある製錬所、三菱製錬所というところで働いていたからです。母親が兵隊にやりたくないということで、3日間だけ丸亀の軍隊に入り、そのあと三菱鋳業という会社に就職させたのです。玉野には三井造船の工場の学校があり、その学校に入校しました。工場では月に1日と15日しか休み

がありませんでした。

8月15日の終戦の日は、学校の庭に集められラジオ放送を聞いたのですが、音声がグワングワンという感じで、聞き取ることができませんでした。何が起こったのかわからないまま工場の主任が、「今日は仕事をやらん。」と言うのです。隣のおじさんが「もう負けたんだって。」と言ったので、私は「おじさん、そんなこと言ったら大変よ。」と言いました。そのうち工場を壊すということが決まり、工場にあるものは何を持って帰ってもいいということになりました。要領のいい人達はいろいろ持ち帰りましたが、私はヤスリ一本持って帰りました。

ご本人からの聞き取りにより作成しました。

\* 1 紀元2600年

初代天皇とされる神武天皇即位を紀元（皇紀）元年とする。紀元2600年となった昭和15年には全国で盛大な式典が開催された。

\* 2 風船爆弾

太平洋戦争において日本陸軍が秘密裡に開発した気球に爆弾を搭載した兵器

## 六 学徒動員の思い出

八王子市	松木 <small>まつき</small>	みよ子 <small>みよこ</small>
杉並区	白川 <small>しらかわ</small>	節子 <small>せつこ</small>
杉並区	宇田川 <small>うだがわ</small>	文子 <small>ふみこ</small>
東大和市	竹内 <small>たけうち</small>	静江 <small>しずえ</small>
日の出町	野口 <small>のぐち</small>	マリ子 <small>まりこ</small>
立川市	小山 <small>こやま</small>	文江 <small>ふみえ</small>

この体験談は、当時、杉並区天沼にあった敷島高等女学校2年生だった6名の方にお集まりいただき、中島飛行機へ学徒動員した時の思い出について語り合っていたいただいたものをまとめたものです。（平成23年12月8日 武蔵野市役所にて）

### 工場での出来事について

私たちが中島飛行機に学徒動員されたのは、敷島高等女学校2年生（14〜15歳）だった昭和19年で、入校式を青年学校で行いました。そのときには、桜蔭、武蔵野女子学院、立正、敷島の4校が一緒に入校し、その後、旋盤やノギス（\*1）の使い方方の練習を1カ月ほど行っただうえで、

職場配属になりました。私たちの学校は1学年2クラスで、国立の工場へ行った人もいました。私たちは昭和20年3月までは武蔵野にいて、それから八王子の浅川に行つて、終戦を迎えました。配属先は2人だけ西工場で、あとの4人は東工場です。私たちが中島飛行機武蔵製作所へ入ってから、数日後にB29の偵察がありました。

私は吉祥寺に住んでいたもので、歩いて中島に通いました。原則、通勤の仕方は自由でした。工員の方はほとんどが、地下道から職場へ向かったとおっしゃっていますが、私たちは地下道を通らず、地上から直ぐ階段を上がつて行きました。終戦の直前なので、いろいろめちゃくちゃだったのだと思います。

工場での仕事は、旋盤や検査、板金の担当になった人もいましたが、主に私たち子どもにやらせるのは、検査が多かったです。工場では部品などの名称に英語表記がありました。敷島は家政だったので、ローマ字しか勉強していなかったもので、英語表記に苦労しました。

戦後も残っていた、NTT2号館だけは、当時も工場としてあり、鉄筋4階建の建物の3階に最終の修正検査をするところがありました。ここはエンジンの部品が集まると

ここで、私は台車に乗ってくる部品と、帳簿に載っている部品とを符合し、位置や数の検査をしていました。検査が通ると、すぐ裏で組立に入ります。この職場は割合と平穩でしたが、途中で配置換えがありました。その職場には、現在、菊華（杉並学院）になっている学校から4名、敷島から3名、立正から2名、計9名の学徒動員の女生徒がいました。皆さんすごく仲が良くて年上の方たちもとてもお姉さんぶりを発揮して、よく可愛がっていただきました。

その部署の仕事は、完成した部品に傷がないかチェックする仕事でした。作業は単純でしたが、オイルの中に細かな砂鉄を入れておき、そこに電磁石をつけた部品を入れ、傷があると砂鉄が付着して確認できるといふものです。オイルに手を入れる必要があり、汚くなる仕事だったので、工員の方が「自分でやるからいいよ」と言ってくれましたが、重い部品以外は手伝いました。一番印象に残っているのは、大きな太い鉄に傷が入っていたことがありましたが、その当時ですから、検査を通過して組立の方まで行ってしまっていました。私たちは折れなければいいのというような気持ちでした。

お弁当は毎日おにぎりでおかずは大根を煮たものでした。食糧事情は結構良かったと思います。しかし、別の部署では、おコメが少しく、その中にこげ茶色の3センチく

らいの乾燥麺が入っていて、鯛のぶつ切りがほとんどで、お魚なんて出たことがないという話も聞きました。配属された場所によって違ったようです。お弁当を持参していた時期もあり、支給されたお弁当は食べないで、最初は持ち帰ったのですが、寮生活の方が大勢いたので、その方たちに、これ食べてといったら喜んで食べてくださいました。それから中島がほとんどダメだと分かった時点で、お汁粉を食べた記憶があります。すごく甘くて美味しかったです。各家庭にはもう小豆もお砂糖なんて全然ないときに、あるところにはあるんだなあと感じました。お赤飯を炊いたつもりだったかと思いません。

通勤のときはラッパ服をもらいました。青年学校に入るとき支給されましたが、丈も長いし、ダブダブの洋服なので、丈を詰め後ろにゴムを入れ直して通いました。青年学校の帰りは、もう夜空にお星様が見えます。それで、1番星見えた、2番星見えたって歌を歌ったり、帰りに軍歌を歌って帰る、そのようなことがささやかな楽しみだったのかなと、今にして思えば思い出されます。

### 工場疎開について

武蔵野の工場が爆撃で破壊されたあと、一時、荻窪の工

場に移り、そのあと八王子の浅川に疎開しました。浅川では毎朝駅に集合をして、駅に置いてある鎌や鍬やスコップを担いで、学徒動員の歌を歌ったりして、工場へ向かいましました。もう部品というのはあまりなかったように思います。カモフラージュをするために、カボチャを植えて歩いたのを覚えていきます。

吉祥寺から浅川まで通うとき、艦載機グラマンが操縦士の顔が見えるような低空の状態で飛んで来ます。

終戦の日も浅川で迎えました。最後の頃はもう仕事がなく、サワガニを捕ったりしていました。

浅川に行った時は、お昼は職場で食べましたが、私はいつも余計にもらいました。私が小さかったからすごく職場の人にも可愛がられて、いつもおにぎりをもらってうちに持って帰ったのを覚えていきます。浅川は山なので、木苺がいっぱいあり、それを採って歩いたりして、帰ってくる道が分からなくなったこともありました。しかし、あまり仕事がないので、職場でもうるさく言われませんでした。

### 空襲のときの思い出

空襲のときは、逃げるといってもバンバン攻撃されています。私たちは、防空壕の場所を知らされていなかったのですが、北の方へ逃げましたが、ただ塹壕（\*2）みたいに穴が掘ってあるだけで、階段も何もないようなところに飛び込みました。空襲警報が解除になっても穴から出られなくて、「助けて、助けて」と叫んでやっと助けてもらったという経験もあります。それからもう、警戒警報が鳴ると怖くて、上司のところへ行くと「まだ警戒警報だ」って怒られるんです。怖いのでドラム缶の陰に隠れて、空襲警報になると飛び出すというようなことをやっていました。

引込み線のところで空襲があり、警戒解除になつてから外へ出たときに、靴を履いたままの兵隊さんの足首を犬が引きずって歩いてるのが印象的でした。その方は発動機を隠そうとしていたのでしょうか。

避難は職場全体でしますから、上の組長とかそういう人が指導しており、働いていた建物が中島飛行機武蔵製作所の敷地の北の端にありましたから、青梅街道を過ぎて、一番遠くは東久留米まで行ったこともありました。艦載機から逃げるため畑をジグザグに走りました。2〜3人で寂

しいっていう思いはなかったですが、畑の道やぬかるみを逃げましたので、いまでは良く頑張れたなあと思います。でも爆弾の落ちる音はものすごい音で、何と言って表現していいか分からないたいへんな怖さは今でも残っています。

私がいた建物は爆弾が落ちませんでしたが、西工場の棟が燃えて、工員さんがあそこで焼け死んだという話を聞いたときはとてもショックでした。しかし、何人の方が亡くなったとかいう情報は一切ありませんでした。

母がもう工場へは行かないでくれと、泣いて私に頼んだことがあります。軍国少女でしたから、私が行かなければ戦争に負けちゃうと思うっていたので、毎日休まず行きましました。そのような状況で毎日子どもを工場へ送り出す親の心境はどのようなものだったかと思うと、今の時代に子どもを育てられて良かったと思います。

#### \*1 ノギス

長さを100分の5ミリメートル単位まで精密に測定する測定器で、外側測定・内側測定・深さ測定・段差測定ができる。

#### \*2 塹壕（ざんごう）

戦争で歩兵が砲撃や銃撃から身を守るために使う穴または溝。日本陸軍では散兵壕（さんぺいごう）と呼んだ。個人用の小さなものはタコツボとも呼ばれる。戦闘陣地の一つ。



座談会の様子

## 七 戦時中の武蔵野市

吉祥寺北町

真田 さなだ

具子 ともこ

私は、昭和8年生まれで、生まれてからほとんど吉祥寺北町に住んでいます。

### 周辺の様子

成蹊学園の中に高射砲陣地があり、そこから、敵機が来るたびに高射砲を打ち上げました。夜はサーチライトで照らすのですが、光が交差した中に飛行機が入るのを、防空壕の中からおそるおそる見上げました。今でも秋の学園祭で打ち上げられる花火の音に、その時を思い出し耳を塞いでいます。

また、現在吉祥寺北町にあるJRの社宅は、当時陸軍の練兵場があり、陸軍が銃を持って匍匐（ほふく）前進の訓練をしていました。

しかし、中島飛行機武蔵製作所のことは、知ろうとしてはいけない事でした。戦争中、近くの住民でさえも工場に関することについては一切秘密だったからです。存在は知っていますが、鉄条網で囲われていて近寄ってはならない所でしたから、戦争中は工場の方へは行ったこ

とがありませんでした。

戦局が悪くなるにつれ大人たちは、ひそひそと会話をしていましたが、子どもには話さないようにしていました。

それと、若い人に伝わりにくいのですが、今、情報社会なので、当時も何でも情報があったと思われるがちですが、情報統制が敷かれていて、そのころはテレビもないし、ラジオも良いことしか言いませんでしたので、戦況がどんどん悪くなっても、本当のことは報道されませんでした。

それから、天気予報も今のようありません。天気が良ければ攻撃目標が定まりますので、天気の情報も軍事秘密でした。

### 食糧事情について

食糧事情については、戦争中はもちろん、戦後の方がもっと食べるものがありませんでした。今でも8月15日の敗戦記念日には、すいとんを作りますが、今のすいとは、シイタケを入れたりしておいしくなります。でも、当時のすいとんはまずいものでした。だし汁などなくて、芋づるやスベリヒユなどの野草を入れていました。

とにかくお米がありませんし、農業をする男性はみんな

な戦争へ行きましたので、農業の担い手がいません。戦後に食糧がアメリカから入ってくるまではとてもひどいものでした。栄養失調でお腹が大きい子どもの写真を見たりしますが、私が見た光景は、体はガリガリですが、顔がむくんでくるというものです。私自身も身体が成長する過程で栄養が足りなかったせいか、今でも雨の日などは、神経痛があります。戦後にビタミンの注射に通いました。昭和一桁生まれは体が弱いといわれています。

#### 小学校での思い出について

私は、今の市立第四小学校に通っていましたが、当時は授業で歴代天皇の名前を覚えさせられました。途中で言いよどむと、一列に並ばされて、男はびんた、女はおでこを突かれることがしばしばありました。終戦までの教育は、戦後には役に立たないものも多く、今ではほとんど覚えていない有様です。

それと、教科書が足りないの上の人から下の人へ貸していききました。私も教科書をお借りして一年経つてお返ししました。ある日、教科書を借りた方のうちに爆弾が落ちました。おそらく爆風のせいでしょうか、四小の門の角の側溝に、私の名前が書いてある教科書が泥まみれで落ちていたそうです。その方の家から四小まで約800

メートル離れていました。私は、そのことを全然知らなかったのですが、先生に「何で大切な教科書をこんな所に汚して捨てた！」といって怒られました。持ち主も借り主も持ち物には名前を書くことになっていました。

また、校庭には石炭殻をいっぱい敷き詰めて、はだしで走らされ、足の裏がとても痛かったのを覚えています。空襲が激しくなり、疎開した人もいるので卒業式はしていません。薄い紙の卒業証書を丸めて持って、もんぺ姿で写真だけ撮りました。

#### 機銃掃射について

四小を卒業してから、三鷹台にある私立の女子校へ通いました。4月に入学してから、体育の授業では7月半ばの夏休みまで、なぎなたなどを習っていました。学校へ行くとき警戒警報がよく鳴ります。警戒警報が鳴れば、学校はすぐ下校させますので、電車が動いていない中、水道道路をひたすら歩いて帰りました。空襲警報が鳴った後、人つ子一人歩いていないところを、皆ばらばらに帰りました。

7月の夏休み前のことです。その日も警戒警報が鳴り、とにかく早く家に帰りたいというその思いだけで歩いていました。防空ずきんをかぶって暑い日射しの中を下を

向いて歩いていました。現在北町一丁目にある社会福祉協議会前の五日市街道から北へ伸びる道へ入ったとき、今考えると本当に偶然ですが、何気なくふつと上を見上げますと、おそらく工場を襲った帰りだったと思います。敵機が一機だけ浮いていました。機銃掃射をしようとして、銃をこちらへ向けています。びっくりして、すぐそばの茅葺屋根の農家の手前にケヤキの木が2本あったので、そこへ走り込みました。その後にはパパッと音がしたので、その家の土間に逃げ込みました。当時の農家は土間などあけ放しでしたので、そこでうずくまっていますと、そのお宅の若い奥さんが出ていらして、「ここにしばらくいらっしゃい」と言ってくださり、しばらくそこにいました。

敵機が去ったあと、とぼとぼと家へ帰りましたが、機銃掃射に遭った事は、恐怖のあまり親にも姉にも友達にも言いませんでした。でも何十年か経つうちに多くの方が機銃掃射に遭っていることがわかりました。

当時できなかった勉強を今しています。中島飛行機武蔵製作所のことや空襲のことについても、書かれた本で知ったことが多いのです。

機銃掃射より我を守りし櫟は今

大樹となりて空を覆へり

三発の爆弾落ちし我が家の路

六十七年は穏しく過ぎぬ

語り部となりてゆかなん我が生れ

育ちて老いを迎えし町に

ご本人からの聞き取りにより作成しました。

## 八 慰問袋と闇米

吉祥寺東町

渡邊 わたなべ とし子 こ

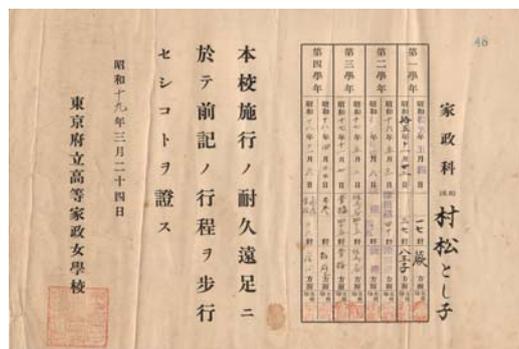
私は昭和二（一九二七）年生まれです。実家は吉祥寺本町の五日市街道沿いの畳屋です。その頃の吉祥寺は新興住宅地だったので畳の注文も多く、職人さんや見習いの小僧さんが沢山いました。店の前には仕事用の自転車、自転車が並んで活気がありました。五日市街道と中央線に囲まれた近所は街灯が少なく、夜になると誰かに鼻をつままれてもわからないくらい真っ暗でした。近くに大きなケヤキの木がありました。その洞（ほら）にフクロウが巣をかけていて夜になるとホウホウと鳴くのです。それは淋しいものでした。

武蔵野町立第三尋常小学校の周りは麦畑ばかりでした。教室の窓を開けると、肥やしの臭いがプンと漂うのです。小学校四年生のとき『支那事変で戦っている兵隊さんのために』慰問袋を三個作りました。キャラメルや飴、千代紙で折った鶴やタオル、平仮名ばかりで書いた手紙を入れ、母と中央線に乗って四ツ谷の陸軍省恤兵（\*1）部まで慰問袋を届けに行きました。お裁縫ができるようになると千人針をお友達と刺して送りました。キャラメルなんかは日持ちがしませんから、兵隊さんの口に入るまでに腐ってしまっただけだと思いますが、折り紙や手紙は無事に届いたらしくお礼の返事が来ました。タオルはとも喜ばれました。戦争がひどくなると物資がなくなると絵や詩を冊子にして送りました。兵隊さん達と文通するのは楽しかったですよ。でも、そのうち途切れてしまふんです。『しばらく返事が来ない』って思っていると『南方で戦死しました』って親御さんから知らせがあつたりしました。

小学校の卒業遠足で善福寺に行きました。私は女子六年一組です。男子とは教室も別です。『男女七歳にして席を同じゅうせず』という時代でしたから六年生全員の写真はこれきりです。



第三小学校卒業遠足善福寺水道施設前



東京府立高等家政女学校耐久遠足記録

勉強が好きだったので東京府立高等家政女学校に進学しました。そこでは毎年、五月と十一月に耐久遠足があります。春に蕨まで一七キロ、秋は八王子まで三七キロ、津田沼、飯能、保土ヶ谷、青梅、春日部、座間……。帰りは省電（\*2）や小田急にりましたが、行きは、二、三〇キロは歩くので大変でした。

また、女学校では修練という科目がありました。東伏見のお稻荷さんの宿坊で合宿をして心身を鍛えるというものです。その合宿の帰りのことです。私は吉祥寺なので道を知らないものだから、練馬区の関町に住んでいたお友達が、『こっちの方が近道よ』と言うのでついて行ったのです。するとカーキ色の軍服を着た兵隊さんが飛んで来ました。

「そこを通ってはいけません。さっさと行け！」

すごい剣幕で怒られて、とても怖い思いをしました。中島飛行機製作所の出入口だったのです。軍事機密だったのでしょうか。それ以来、中島の周りには近寄りませんでした。

女学校二年生、一四歳の初夏のことです。一番最初に慰問袋を送った兵隊さんが訪ねて来てくれました。新宿の二幸前で待ち合わせをして美好野という店であんみつをご馳走になりました。

女学校が夏休みの間は、勤労奉仕をしました。王子にある内閣印刷局で一円札、軍票、満州国の通貨の圓などの印刷を手伝いました。朝、印刷局に入るときは何にもないので、夕方出るときは身体検査があつて、お弁当箱の中まで調べられました。

昭和一九（一九四三）年六月五日に、連合艦隊山本五十六長官の国葬が日比谷公園でありました。女学校のお友達と参列しました。沢山の人が出て山本長官の棺になんか近付けもしないのです。『これからどうなっちゃうのかな』と不安になったことを覚えています。

教師になりたくて女学校卒業後に、東久留米の青年師範教員養成所に入学しました。しかし、家の事情もあつて一学期で中退しました。職人さんや小僧さんが次々に戦争にとられてしまふし、畳替えをするような余裕のある家は少なくなってきたのです。

父が畳の注文を受けていた三鷹航空（現在の三鷹市旧日産厚生園付近）で事務の仕事に就きました。三鷹航空は飛行機のエンジンを造る軍需工場です。そのため比較的物資が豊かで、お酒や鮭缶の配給がありました。配給された合成酒を飯盒（はんごう）につめて持って帰ると父がとても喜んでくれました。

昭和一九（一九四四）年一月に中島飛行機に空襲が

あったことは知っていますが、どのくらいの被害だったか詳しいことはわかりませんでした。被害状況の報道なんてありません。ラジオの大本営発表は毎日のように『勝った、勝った』としか言わないのです。ただ、本宿の大ケヤキの向こうからB 29がわーって飛んできて、中島の方でバラバラと爆弾を落としていくのは見えました。味方の高射砲なんか下の方でポンポンしているだけでB 29には届きません。年も若かったので空襲も怖いとは思いませんでした。空襲警報が鳴ってもそれ以上の情報がないものですから、どこに爆弾が落ちているのかわからないでしょう。仕事をしなくても済むって井の頭の近くの公園でブランコに乗って遊んだりしていました。

昭和二〇（一九四五）年三月一〇日の東京大空襲は、あれを知らなかったら東京に住んでいたとは言えません。私の部屋は二階の東向きでした。三月九日の夜中に空襲警報があつて、窓を開けたら東の空がすごい明るさです。新聞が読めるくらいの明るさの中で『こっちまで来るんじゃないか』とガタガタ震えていました。B 29が来たらいつでも逃げられるようにオーバーを着て靴を履いて窓にしがみ付いていました。家の庭に防空壕がありましたけど、あんな空襲だったら入っても助かりません。たいして深くないし屋根がトタンなんです。だから爆弾が落

ちて家に火がついたら井の頭公園にでも逃げようって思いました。

女学校のお友達から戦後に聞いた話です。彼女は東京都庁に勤めていました。大空襲の翌日、焼けた死体をスコップで片づけてリヤカーに乗せて運んだそうです。

「黒焦げの人がたくさん転がっている。でも怖いっていう気持ちはなかったわ。自分の気持ちもおかしくなるのね。私は、平気で死体を片付けていたのよ。」

その年の五月に一八歳で結婚しました。新宿であんみつをご馳走してくれた一一歳年上の人です。夫の繁太郎は二〇歳で陸軍第三師団歩兵第二九旅団静岡歩兵第三四連隊に入隊しました。九カ月後に中国上海の呉淞（ウーソン）に上陸、戦闘中に顔面に被弾しました。鼻の手前



慰問袋の返礼に届いた写真

で弾がとどまり貫通しなかったので命に別状はありませんでした。私の慰問袋はこの頃に届いたのです。夫は慰問袋を送ってくれた人には全員にお礼状を書いたそうです。返事が来るとまた手紙を書いて…筆まめな人です。

夫は召集解除になって満州にある満州塗装牡丹江支店に勤めていました。休暇をとって新婚旅行に行きました。宿泊は伊豆の帝山閣大仁ホテルの離れです。関東軍（\*3）の塗装の仕事を請け負っていたらしく、たいそう派振りがよかったです。私が三鷹航空の事務員をやっていたときの月給は五〇円です。夫は八〇〇円でした。今で換算すると月収一〇〇万円ぐらいでしょうか。物資は全て配給制だったのに、お膳には沢山料理が並んでいて『あるところにはあるんだなあ』と思いました。夫は協和服（\*4）、私はモンペ姿でしたがうれしい新婚旅行です。

二人でホテルの庭を散歩しているときに、マリアナ諸島から飛んで来たB29が富士山を右に旋回して行くのが見えました。『あ、東京が空襲される』って、両手を合わせて『どうか、みんな無事ですみますように』と祈りました。『自分ばかり贅沢していいのかな』と思いました。

それから夫は故郷の静岡県沼津から汽車に乗り、長崎

県仙崎から船で韓国の釜山に渡りました。満州塗装の事務を引き継いだら東京に戻るようになっていました。牡丹江に着いたのは六月でした。

八月、三鷹航空で上司だった課長さんの故郷に新型爆弾が投下されました。課長さんは故郷に残した奥さんと七歳になる娘さんと生まれたばかりの息子さんを探すため、中央線で名古屋まで出て京都から山陰本線に乗り換えて島根から広島に出たそうです。幸い家族は無事でした。その課長さんが『これは誰にも言つてはいけませんよ』と口止めして教えてくれました。

「広島駅に降りたときはね：足がすくんだよ。新型爆弾はマツチ箱ぐらいの大きさで、広島の上空何百メートルのところ爆発したんだそう。それだけで何十万人もの人が死んでしまった。そりゃ、恐ろしいことだったよ。」

同じ月の一五日の朝からラジオで『正午に重大ニュースがある』ということだったので、家において放送に耳を澄ましました。雑音が多くて内容はよくわかりませんでした。『自分がアナウンスされた』今夜からは灯火管制（\*5）は解除される』という内容は聴き取れました。それで戦争が終わったんだってわかりました。遠い戦地や空襲で死んでしまった人たちには悪いと思いました。

『今夜から安心して眠ることができる、命が助かった。戦争が終われば夫も満州から帰って来てくれる』と思いました。

夫は終戦間際の八月八日に、牡丹江省八面通の第一二六師団歩兵二七九連隊に召集されていました。九日未明のソ連軍の宣戦布告後、牡丹江方面への進軍を遅らせるべくソ連軍の戦車部隊と戦っていたのです。終戦後の一日午前一〇時三〇分、参謀長が日章旗と白旗とを挙げて降伏するまで戦闘は続いたそうです。それから收容所に入りました。日本軍をシベリアに送り労働させるという噂があり、部下を率いて收容所を脱走したそうです。ロシア語ができる部下がいたのでムシロ旗に『満鉄従業員』と大書きさせて、堂々と街道を歩いて吟爾浜（ハルピン）まで戻り、奉天の満州塗装本社に辿り着いたそうです。

昭和二一（一九四六）年八月に舞鶴港に復員しました。引揚げの心労が、初年兵のときに被弾した古傷を悪化させていました。端正な顔が腫れ上がって目やにと鼻水が止まらないんです。吉祥寺の宇都宮耳鼻科で診てもらいましたが、弾傷は町医者では治せないということで、牛込の陸軍第一病院を紹介してもらいました。放置しておく和被弾した弾の毒が脳に回って助からないと言われま

した。でも手術のために入院するには賄い用の米がいるんです。戦後の食糧難で米なんかどこにもありません。

仕方がないので私の着物を持って夫と東北本線に乗りました。闇米（\*6）を手に入れるためです。あっちこっちの農家で頭を下げてなんとか着物とお米を交換してもらいました。やれやれと思つて帰る途中、警察官に呼び止められて、お米は押収されてしまったのです。

「俺はお国のために満州で戦ってきたんだ。顔を打たれて、敵弾が入ったまま戦ってたんだ。金鵄勲章までもらった俺を、貴様、罪人扱いする気がっ！」

夫はすごい剣幕で一步も引きません。警察の人も仕事ですからお米は返してくれません。そのうちに日が暮れてしまい、上りの汽車も終わってしまいました。

途方に暮れていたら近所のお寺の住職さんが『泊まる場所がないなら、うちに来なさい』って声をかけてくれたんです。とても立派なお寺で境内に大きな碑が建っていました。一晩泊めてもらつて、翌朝帰ろうとしたら住職さんが『これ、持って行きなさい』つてお米を持たせてくれたんです。本当に有り難いことでした。でも、夫は頑固ですから『ありがとうございます』の一言もないんです。

ずっとあとになって調べましたら、雲巖寺という松尾

芭蕉が『奥の細道』で立ち寄ったお寺だったんです。

木啄（きつつき）も庵（いお）はやぶらず夏木立

松尾芭蕉

（意味：啄木鳥も徳の高い和尚の結んだ山居だけは破ろうとしない。こうして和尚の修行した庵を訪ねることができたのは有り難いことだ。）

きつと警察の人も復員兵の境遇を気の毒に思ってくれたのかもしれない。でも、夫は怒ったきり謝る気は毛頭ありませんから、『ここは徳の高いお寺の住職さんに任せて』ということだったかもしれない。

陸軍第一病院で中国戦線から復員してきたという軍医さんが執刀してくれました。一回目は右頬を切開しましたが駄目でした。二回目は鼻にメスを入れました。

陸軍病院の傷病者はむごかったです。膝から下が無い兵隊さん。腕がない、鼻や耳がない兵隊さん。二の腕から皮膚を移植するため鼻や耳に自分の腕の肉を付けたまま横になっている兵隊さん。学校が空襲になったときに燃えている奉安殿（\*7）に飛び込んで御真影を守って体中が焼けただれた若い兵隊さんは、本当に気の毒でした。夫は三回目の手術で上唇の裏からやつと弾を摘出できました。

それから、夫の故郷の静岡で煮干や鰹節などの乾物を

仕入れて、東海道線で運んで東京の商店に卸すという担ぎ屋をしました。夫婦で働いて資金を貯めて吉祥寺で乾物屋を開きました。無一文からの出発でしたが頑張ればなんとかなると思いました。おかげさまで四人の子どもに恵まれて、孫は九人、曾孫は七人です。

あの時代に生きた人はみんな苦労しました。私だけが大変だったわけじゃないのです。けれどみんなそういう経験若い人に継げないでしょう。辛かった戦争や、それでも楽しかった青春時代をこうして伝えることができるのはうれしいです。自分の八五年の人生もまんざらじゃなかったって思えます。



摘出被弾と金鵝勲章



お正月、吉祥寺本町の渡邊乾物店前

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

**\* 1 恤兵（じっぺい）**

物品や金銭を寄贈し戦地の兵を慰めること。

**\* 2 省電**

「省線電車」の略。戦前、東京近郊の通勤電車の愛称として使われた。

**\* 3 関東軍**

中国遼東半島は関東州と呼ばれており、満州に駐屯する日本陸軍の独立守備隊の呼称となった。

**\* 4 協和服**

戦前の国民服に似た服。首から紐をさげ、その先端は満州国の象徴である5色（黄色、紅、藍、白、黒）の房になっていた。

**\* 5 灯火管制（とうかかんせい）**

米軍機の空襲時、地上の明かりが標的にならないように家々の電灯に黒い袋をかぶせた。

**\* 6 闇米（やみごめ）**

終戦前後、食料や物資は配給制となった。公式なルートではない米等の取引は犯罪行為だった。

**\* 7 奉安殿（ほうあんでん）**

天皇・皇后の写真を保管してある場所。戦前は各学校にあった。

## 九 中島飛行機武蔵野と給友会

八王子市

清水 しみず 正之 まさゆき

戦時中の軍需工場勤務は大変厳しく、つらいことのみが多く語られている。中島飛行機武蔵野製作所の給友関係業務に携った私達は、男女を問わずしばしば半徹夜などしながら、よくがんばった。また、同時に明るい職場づくりのことや家族や交友関係、遠いふる里のことなど、なごやかな雰囲気の中で語り合ったりした。こうしたはるか過ぎ去った当時のことを私達は、常になつかしく感じていた。武蔵野給友会はそうした仲間達の希望が、実を結んでできた会である。

### 戦時体制への道

昭和十二年四月、私は東京府立第二商業学校（八王子）に入学した。勉学に第一歩を踏み出して間もない同年七月、支那大陸（中国）の北京郊外、蘆溝橋付近で日本軍と中国軍が衝突、いわゆる蘆溝橋事件がおき、戦火は忽ち中国全地に拡がり、全面戦争と変わっていった。

翌年の昭和十三年には国家総動員法が施行され、日本中が戦時体制へと突入していった。欧州でも日本の同盟

国ドイツがポーランドへ侵攻し、第二次世界大戦が勃発した。日本では支那大陸における戦闘で多くの犠牲者が出て、国民の日常生活でも種々の制約が行われ、日増しに戦時色が濃くなってきた。

私達の学校生活も勉学や体育に励むなかで、周囲の環境は戦時色に厳しく影響を受けるようになった。

学校には軍から配属将校が派遣され、軍事教練が行われるようになった。二商では教練振興隊を結成し、訓練の一層の充実がはかられた。また同時に勤労奉仕の名のもとに近隣の農家の手伝い、官公署施設の清掃、工場の作業手伝いにも動員されるようになった。そうした多忙の中でも、私達は学徒本来の勉学に、一所懸命取り組んでいたと思う。

戦争はその後、中国全土に拡大され、私達国民の日常生活は一層厳しさを増してきた。「撃ちてしやまん」「ぜいたくは敵だ」など、志気高揚のためのスローガンが街中に目につくようになった。国中が時の政府や軍部の政策に沿って突き進んで行った。

戦争の拡大に伴う国家総動員体制が強化される中で、かなり早くから三多摩地区に軍需産業の進出がはかられ、年毎に拡大強化されていった。その最大の航空機関係軍需工場として、中島飛行機(株)武蔵野製作所の進出をみた

のであった。

### 中島飛行機(株)へ入社

昭和十六年に入り、私達五年生の就職は戦時体制一色「国民総動員」のご時世とあって、ごく自然に決められたようなものであった。殆んどの方が軍需産業を指名し、あまり疑問をいだく者もなかったような気がする。私は軍需産業最大手だった中島飛行機(株)入社が決まった。私他に同窓の三名も同じく入社が決まっていた。

ところがいよいよ来年（昭和十七年）三月には卒業だと思っていた矢先、誰しも予期しないことが起きた。

昭和十六年十二月八日、大本営陸海軍部から

「帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」

の発表があった。たちまち日本中から興奮の渦が巻き起り、「米英打つべし！」の声がとびかかった。

私達の卒業は急遽繰上げと決り、昭和十六年十二月二十日、卒業式がとり行われた。私の同級生は丁度百名であったが、みんな再会を約してなつかしの母校をあとにした。

そして、私が中島飛行機(株)へ入社したのは、翌昭和十七年一月であった。

入社式が行われたのは、武蔵野製作所東方に当る青年学校のグラウンドだったような気がする。新入社員は約百二十名で、通勤者と寮生活者半々位だった。最初の一週間は寮に宿泊して一般教養とか実習を受けることになった。私は第二班の班長を命ぜられ、会社担当者や新入社員との連絡役をすることになったが、結構忙しかった記憶がある。

実習の旋盤の取扱いには、機械など一度も取り扱ったことのない私は、とまどうことが多かった。実習が終ったあと、何回か社歌の練習をしたこともあった。

光燦（さん）たる旭日の

朝雲高く 射すところ

躍進日本の前衛と

文化の翼 鍛えゆく

われ等ぞ 武蔵野製作所（以下省略）

この社歌は今でもよくおぼえている。

また会社ではこうした実習の他に、全社員（主に事務系男子）を対象とした精神修養の研修も行っていった。修養団という会の主導で実施され、私の場合は一月末頃、あいにく小雪のちらつく東伏見道場で

人よ醒（さ）めよ 醒めて愛に歸れ

愛なき人生は暗黒なり：

と皆で誓願を合唱しながら受講したことを覚えている。



入社式後、青年学校前庭にて（昭和17年1月）

### 給与課へ配属

約半月の実習等が終って、新入社員はそれぞれ各職場へ配属された。私の配属先は総務部労務課給与係（のちに給与課）であった。場所は東門に近い事務棟の一階で、部屋もかなり広く、戸田労務課長、松浦勤労係長それに黒澤給与係長という編成であった。

給与係は何万人もの従業員の給与計算を担当するだけであって、人員も多く、五十名位だったと思う。

黒澤係長は仕事にはきわめて厳格な方で、周りはいつもピリピリした感じがしていたが、その反面、小林・柚井両班長はとてもソフトな感じで仕事をきり廻していたのが印象的であった。

毎日の朝礼には全課員が参加し、伝達事項のお話のすぐ後、みんなからトンボ体操といわれた柔軟体操をやった。体操のリーダーは各係からの交替制で、給与係からは私も指名されたが、学校時代陸上部だった今井君も張切ってやった姿が目につかぶ。

給与係の主な仕事は、数万人の従業員の給与計算と支給であった。そのため月末近くになると機械・焼入・銅工・発動機などの各職場に行つて、工員さんの勤怠調査（仕事をなまける人はいないが、タイムカードを調べる際の用語に、なぜか「怠」がついて呼ばれていた）を行



給与課の人たちと西工場の屋上にて（昭和18年10月）左端が清水氏

い、各人毎に出勤・欠勤・残業時間等の伝票を作成した。その後、実働給・奨励金・残業手当等の計算と控除金等の差引をして、最後に賃金の袋詰めを行い、各職場に向いて支払いをしていたが、常に多忙であった。

そのため一か月のうち何日も残業した。女子も八時過ぎまで残業することが珍しくなかった。夜の夕食のとき、各人が仕事のことや趣味、ふる里のことを話したり、ごくまれには小さな声ながら、軍歌を歌ったりしたこともあった。ちなみに当時の歌といえば「勝利の日まで・加藤隼戦闘隊・みくにの子供…」など、何十年たっても忘れられない歌である。

こうした連日の緊張のなか、百数十名という大世帯の労務課による鎌倉への行楽が催されたが、楽しかった思い出として参加者の心の奥深くきざみこまれていることであろう。

この頃、中央線三鷹駅から工場へ通う道は砂利道で、周囲は杉林がつづき、農家が点在していた。進運バス（今の関東バス）が吉祥寺駅から北裏まで通じていたが、利用者は少なかった。

昭和十八年十月、武蔵野製作所は西隣りの多摩製作所と合併し、武蔵製作所となった。所長も澤守源重郎所長



工場から三鷹駅への帰り道での給与課の人たち。周囲は一面の杉林でした。（昭和 19 年春） 後列中央が清水氏

から佐久間一郎所長にかわった。同時に業務組織の改正が行われて、私の所属する労務課給与係は独立して給与課となり、黒澤課長が就任された。事務室は東工場から西工場の二階へ移転した。

そして、翌昭和十九年四月には学徒勤労動員が始まった。やがて近隣の女学校から女子挺身隊として派遣された女子生徒が数名、給与課に配属となった。先輩の女子事務員も若い人が多かったが、それでも現役生徒の配属で職場の空気も一段と明るく活気づいたような気がした。皆さんは仕事の覚えもよく、すぐに戦力となり給与課としては大助かりであった。隊員の一人、川村学園からきた女性社員さんは大変目立つ存在で、仕事のことや同僚隊員の世話などしていたことが今でも目にうかぶ。給与課の事務室も西工場での業務は短かく、やがて元の東工場へ戻った。

この頃、徴用で何名かの方が配属となった。皆さん銀行・保険会社などの管理職や自営業の方が殆んどであったが、新しい職場で精いっぱい勤務されていた。

### 最初の空襲

戦局は一段と深刻となり、昭和十九年七月にはサイパン島が陥落、十月にはレイテ沖海戦で海軍は大打撃を受

け、米軍機が日本本土の各地を空襲するようになった。

そして私達中島飛行機従業員にとって忘れることのできない、昭和十九年十一月二十四日の大空襲。サイパン・テニアンより発進したアメリカ空軍B29爆撃機百十一機のうち、二十四機が武蔵製作所を空襲、工場内で死者五十七名、負傷者七十五名の犠牲者を出した。

空襲が始まったのは丁度昼頃で「空襲だ！みんな早く退避しろ！」との指示で一斉に地下道へ退避した。工場いっぱい爆発の音がなり響き、みんな恐怖にさらされていた。私達の事務所の真南にある防空壕で、タイピストの女子事務員が十名以上、焼夷弾の犠牲になったと聞いた。地下道にいる私達の目の前に火傷を負った怪我人が運び込まれるなど、とてもいたましい体験をしいられた。唯一つ救われたことは、給与課から一名の犠牲も出さなかったことであった。

更に十二月三日には第二回目の空襲があり、主に勤労働員学生に多くの犠牲者が出た。その後も空襲は年末から翌昭和二十年に入ってからもあり、その都度多くの被害を受けた。空襲の際、私達は井の頭公園近くまで避難したこともあった。

昭和二十年三月八日、私は、軍隊入営の命を受け、和歌山市にある暁部隊（陸軍）に入営することになった。

十日に東京・王子の親戚にいとまごいに行つたが、またまその夜、東京下町が大被害を受けたいわゆる帝都大空襲に遭つてしまった。幸い無事に帰宅できたが、家族には大変心配をかけてしまった。十七日、会社に入営のご挨拶に伺い、在職中のお礼を申しあげた。

三月二十一日には予定通り、暁部隊に入隊した。早速翌日から和歌山城や浜辺で訓練がはじめられたが、かなり厳しいものであった。しかし、六月には広島県尾道へ転任となった。やがて幹部候補生の選抜試験が実施されたが、合格することができた。その後の訓練は尾道の沖合、瀬戸内の小島・佐木島で続けられた。

そして運命の日、昭和二十年八月十五日、天皇陛下の玉音放送により終戦となった。永いこと苦難の道を歩みつづけてきた太平洋戦争は終わりを告げたのである。私はその後、除隊手続きも終り、九月七日、家族の待つ八王子の我が家に帰還した。

### 武蔵野給友会の発足

戦時中、中島飛行機武蔵野製作所に勤め、給与関係の仕事をしてきた仲間の一人が、昭和四十六年三月の読売新聞「投稿欄よびかけ」が切っ掛けとなって集つたのが給友会のはじまりである。

同年八月八日、最初の集まりが工場の至近駅だった三鷹駅前で、男女十四人が顔を揃えた。多くの犠牲者を出し、国土を荒廃させた未曾有の戦争を乗り越え、今元気に無事再会できた喜びで、話は尽きなかった。

今後毎年、会合を開くことが決り、早速、給与課に籍のあった社員（約百名）の住所、氏名等の調査や呼び掛けを始めた。その結果、年毎に参加者も増え、会員同志の懇親も一層深められていった。会の名前も「武蔵野給友会」と決まった。

会合は三鷹、吉祥寺をはじめ、新宿、鎌倉、横浜、調布、高尾山麓など、その都度場所を変えて催された。出席者も毎回二十名から三十名位で、なかには遠く京都、神戸、富山等からはるばる参加される方もあり、大変な盛況ぶりであった。

しかし会員も高齢者が多く、健康問題や転居された方、また死去された方もあって参加者も次第に減少の傾向がでてきた。こうした事情から去る平成十六年五月の懇親会を最後に、戦時中から数えれば六十年以上にも及ぶおつき合いではあったが、武蔵野給友会は解散したのである。

その後、年一回は皆さんとお話しをしたい、と希望される方もあって、五月の第一日曜日を「給友会の日」と

決め、集合場所を新宿駅西口、午前十時として数年間、少人数ながら懇親会がつけられた。

「戦中の中島飛行機武蔵野の日々」「戦後の武蔵野給友会の集り」は、給与課の皆さんにとって生涯忘れえぬ思い出として生きつづけることでしょう。



旧給与課の方たちと三鷹駅北口レストラン前にて

(昭和46年8月) 後列左が清水氏

## 十 戦中・戦後の食糧難

吉祥寺北町

安部<sup>あへ</sup>

菊園<sup>きくほ</sup>

### 戦時中の食糧難

私は、昭和8年7月に東京の浜松町で生まれ、昭和14年、小学校に入る頃、家族と一緒に小金井市に引っ越しました。

父親は浜松町で地金問屋をやっていたので小金井市から浜松町まで電車で通っていましたが、その店も空襲で丸焼けになってしまいました。

当時、小金井から東の空を見ると爆弾が落ちていくのが見えました。親子焼夷弾というのでしょうか。それがパラパラと落ちていく様子がとても綺麗で印象に残っています。私は七人きょうだいの一番上ですが、そのことを下の妹たちに話しても皆小さかったのでよく覚えていないようです。

戦争が始まってからは食糧事情が悪くなり、昭和17年頃から配給制となりました。配給品は、鱈ばかりで、しかも切り身が一人一切れ、それと八人家族に四分の一玉ぐらいの力ボチャです。それも何日かに一回しか配給がありません。そのわずかなおかずを家族全員で食べまし

た。

当然、配給品だけでは食糧が足りないので、小金井駅の近くにある雑炊屋さんへの買い出しや、農家に力ボチャやジャガイモの買い出しにも行きました。その帰り道、当時砂利道だった今の農工大通りで、機銃掃射に狙われ、大きな木の下や、近所の家の軒下などに妹と一緒に隠れた記憶も残っています。

野川のほとりでは、のびるやなずな、はこべ、せりなど少ししか採れませんでしたが、おかゆや雑炊に入れて食べたりしました。また、ふすま（\*1）はお団子やご飯に混ぜて焼いて食べましたが、なかなかくつつかずボロボロになってしまいました。

当時の子どものたちの遊びといえば、男の子は馬乗り、女の子は石けりやゴムまり、ゴム縄跳び、お手玉などでした。お手玉は、小豆がなかったので数珠玉（\*2）を入れて遊びました。

終戦後、学校では勉強もせず、毎日教科書に記載されている「戦争」や「軍艦」などの文字を墨消しする作業を行っていました。戦争に関する話も学校ではあまりしませんでした。

## お風呂屋さんでの思い出

我が家のお風呂は、父が立派なタイル貼りの風呂釜を作ってくれましたが、当時燃やすものとして使っていたコークス（石炭カス）などの燃やすものがなく、家族でお風呂屋さんに行きました。お風呂屋さんでは、脱いだ服の番をしていないと、他の人に持って行かれてしまうので交代で見張っていました。それでも妹の服は下から上まで全部持って行かれることもありました。お風呂の中でも、手ぬぐいや石鹸が持つて行かれるのできょうだいで順番に見張りをしていました。お風呂のお湯も半分くらいしか入っていないので肩まで浸かるなんてことはできませんでした。

## 食糧疎開について

東京では大家族が食べていくだけの食糧確保が難しかったので、終戦後の昭和20年12月26日に東京を発つて父方の曾祖父の田舎に「食糧疎開」しました。

東京駅では、一人でも多くの人が電車に乗りたいために、窓ガラスを叩き割って乗ってこようとしています。母親はお腹が大きかったなので、私が一番下の妹をおんぶして、弟たちの手をつなぎながら家族全員で電車に乗っていましたが、自分たちの席の窓ガラスも割られたりして大変

な思いをしました。

遠い親戚のおばあちゃんに、田舎へ帰ってくれば白いご飯が食べられるよと言われたので行きました。初めのうちは白いご飯を食べることができました。田んぼは二反ぐらい作っていましたが、そのうちにだんだんと食べるものに困るようになりました。

私の母親は浅草の歯医者娘で、畑仕事などしたことがないのに、子どもたちを育てるために、草むしりなどの農作業を一生懸命していました。

## 主人の戦争体験

私の主人は東京の本郷生まれで、赤門の近くに住んでいました。そこで四月十一日に東京の空襲を体験して命からがら逃げだしたそうです。背中まで火の手が迫ってきているので倒れている人を助けたくても助けられない。自分が逃げるので精一杯だったので、人をまたいで逃げたと話していました。

その後、主人は、兄弟と一緒に栃木の方へ集団疎開しましたが、疎開先では、着るものも食べ物もなく大変苦労したようです。通っていた東京の小学校の卒業式も空襲のため行われず、「自分は卒業証書をもっていないから、学校出ていないんだよ。」と言っています。

主人はこれまで私にも子どもたちにも戦争の話は一切  
しませんでした。3・11の震災があったから、戦時中  
の情景と重なったのでしょうか、その後、少しずつ話し  
てくれるようになりました。

あのような大変な時代の中、私を丈夫に育ててくれた  
父母には感謝してもきれません。

ご本人からの聞き取りにより作成しました。

\*1 ふすま

小麦の糠（穀物を精白した際に出る果皮、種皮、胚芽などの部  
分）

\*2 数珠玉（じゆずだま）

水辺に生息する大型のイネ科植物。実は熟すと固くなる。



さまざまな端切れを使って作った  
お手玉（ご本人作成）



数珠玉の実

## 十一 戦争とともに歩んだ

### 都立五商一期生の思い出

三鷹市

田村 たむら

禮二 れいじ

この体験談は、都立第五商業高等学校創立70周年記念に寄せられた文章の一部を抜粋したものです。

入学直後の昭和十六年十二月八日、生涯忘れることができない太平洋戦争が勃発しました。そしてこの日を境に学校の授業も軍事色が急速に強まり、配属将校（当時は、中学校以上には、現役軍人で将校が配属させられていました。）の指揮のもと、厳しい軍事訓練が課せられました。

軍事関連施設の見学、勤労報国隊の校外活動などが行われ、緊張した毎日でした。戦争末期の昭和十九年には、「学徒勤労動員令」が発令され、同年六月には、当時東洋一の航空機工場と言われた中島飛行機武蔵製作所へ派遣させられました。広大な軍需工場で二十四時間フル操業、私たちも交替勤務を伴う作業に就き、不馴れな作業に言い尽くせないさまざまな困難があつ

たにもかかわらず、お互い助け合い、同期生一同誇り高く、与えられた使命を全うしたと自負しています。

この動員作業で身につけた「我慢・忍耐」の精神力は、戦後の厳しい苦難を経て現在までの長い人生を歩み続けた原点にもなっていると考えています。

勤労動員とともに、ここで特別に語っておかなければならないことは、入学の直後から、時代の要請に応じ、学窓から軍隊へ勇躍志願した同期生のことです。応募したのは五兵科に及び、とりわけ少年航空兵に入隊した小山保清君は、南太平洋で散華（\*1）しました。また北朝鮮で終戦を迎え、ソ連軍に抑留された特別攻撃隊入隊の斉藤道夫君は、遙か中央アジアのカザフスタンのアルマティ市近郊に抑留され、酷厳の状況のもとで重労働を課せられたにもかかわらず、奇跡の生還を果たしました。

中島飛行機への動員から五か月を過ぎた頃、米戦略爆撃機の発進基地がマリアナとなり、ここからB29が直接日本本土へ飛来するようになり、昭和十九年十一月二十四日の第一回目の集中爆撃以来、工場の壊滅作戦が開始されました。この攻撃は計九回、五百五機に及び、この徹底した爆撃によって中島飛行機は消滅させられました。

とくに私たち同期生やその付き添いになった諸先生にとって、最も衝撃的だったのは、昭和十九年十二月三日の空爆で同期生十名が避難した防空壕で殉職したことです。この生徒の殉職・負傷が私たちはもちろんですが、先生方に与えたご心労・ご苦悩が如何ばかりだったか、察するに余りあることでした。

初冬の寒かった当日の夜は、東伏見稲荷神社横の仮通夜場で、私たちは灯火管制下のもとで許された、ごく短い線香を供え、寂しい文字どおりの「野辺の送り」をおこないました。今思い返しても辛く悲しい出来事でした。毎年の同窓会例会での思い出話のなかで、印象的なことは私たち一期生の卒業式です。校舎二階が空爆で破壊されたままの講堂で形ばかりの卒業式しか出来ませんでした。

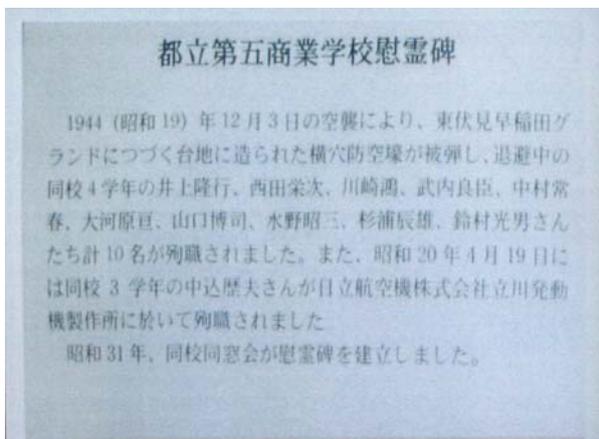
卒業写真を撮った写真屋さん、自宅が戦災に遭い、撮影したフィルムは焼失してしまいました。そのため私たちに、卒業の思い出になる物は一切ありません。「十六歳の儂い青春」というべきでしょうか。戦争は人類にとっての最も残酷で愚かしい出来事であるとともに、個々の人間にとっても、最も耐え難い傷跡を残すものです。

「五商慰霊の日」の十二月三日、母校在校生有志の方々

は、今でも殉職者（日立航空機で殉職した三年生を含め十名）の冥福を祈る行事と慰霊碑への献花を続けておられます。私たち一期生一同はこのことに深く感謝していることを最後に述べておきたいと思えます。

#### \*1 散華（さんげ）

戦争にて日本軍の兵士が戦死することを美化して散華という。戦死を美化する表現である玉碎とほぼ同義に使われるが、特別攻撃隊による戦死においてはこの表現が用いられることが多い。



五商内に建立されている慰霊碑